

東海能楽研究会 年報

室町期能楽旋律の変遷

〈キリシタン音楽資料紹介〉

小島 英幸

能楽史研究の各分野の中、最も遅れているのが音楽部門である。この主因は、これまでの能楽研究者の多くが音楽を苦手とし、中学校程度の音楽用語や五線譜が出てくると、それだけでもう辟易してしまふことにある。しかしそれでも、音楽面の研究は少しずつ進歩し、大戦前にくればると、かなり多くの事実が明らかになった。

室町期の謡曲旋律は、当初は声明と同種のものであったと推定される。永正頃の金春禅鳳伝書毛端私珍抄に「吟をしらぬ人のつけたる節は、ふしにてはなし。さだまりたる事也。稱名の上手によくよく尋給ふべし。」(表章・伊藤正義、金春古伝書集成、わんや昭四四年、三四三頁)とある。また現在まで伝わる声明と同種の能楽旋律としては、律音階(音階図参照)に乗る根尾能郷翁の旋律(小島英幸、謡曲の音楽的特性、音楽之友社昭六〇年、七四頁)がある。

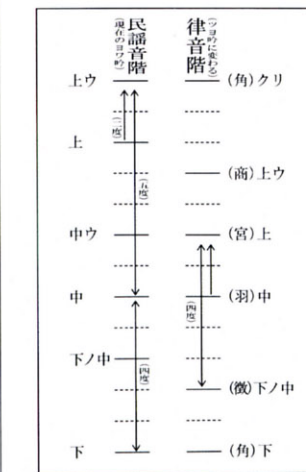
古い謡曲旋律の記録としては、麿芥抄(天正一一年)クレハ上歌旋律が有名である。この記録の解説に関しては、山口庄司(能音楽の

研究 音楽之友社昭六二年、一八五頁。東洋音楽学会編 日本の音階、音楽之友社昭五七年、二七五頁)及び蒲生美津子(音楽の音楽的研究、三省堂昭五八年、二五七頁)の研究がある。両氏の解説結果は、両者が完全に一致しているわけではないが、声明と同じように、ほぼ律音階に乗っている。

この律音階に関連して注目すべき記録がある。観世小次郎伝書(元龜元年)節章句秘伝之抄(表章、細川五部博書、わんや昭四八年、一〇〇頁)に「中音とハ羽の位也。羽の位の二字めハハ

る也。月ハ山(三井寺)、花さかバ(鞍馬天狗)、如此の類なり。」とある。これによると当時の謡曲では、中音は羽の位であり、これに基づいて、律音階に宮商角徴羽及び現今のツヨ吟音階名をあてはめると、音階図のようになる。民謡音階に乗

る現今のヨワ吟では、「月ハ山」「花さかバ」は上音でうたわれる。しかし当時は中音でうたわれたらしい。これは明らかに、当時の謡曲音階が、現行のヨワ吟音階とは異なっていたことを示している。そして当時の律音階に乗るヨワ吟が、後にツヨ吟に変わって行ったものと思われる。



以上のように、室町末期以前の謡曲が、声明と同種の歌謡であったことは確実である。

声明の特色は、その旋律の動きが四度以下であり、五度の動きがないことである。これがどのような経路により、五度の動き(本張り・本落し)をもつ現今ヨワ吟旋

録 採 吉 弥 岡 片
譜 採 平 良 崎 寺

サン ジュアン さまの歌

とは重要な任務の一つであった。その松が舞台に描かれることは自然な発想であったと思われる。現在でも演者が登場の最初に謡う次第を、観客に背を向け鏡板に向かって謡うのは、そのゆえであるという。このような由来に鑑みても、やはり老松でなければならぬということになる。

また、江戸城本丸表舞台の鏡板の絵はこれを担当した御絵所狩野家の図取によって、みことな老松であったことが知られる(図参照)。これが全国の大名の舞台の規範になったと思われる。しかし、世阿弥の時代に鏡板はなかった。老松はただか三百年ほどのことなのだからそんなにこだわらなくてもとする論もありえよう。しかし、その三百年の明白な歴史を無視するわけにはいくまい。なぜならその間に能は洗練されたのだから。

世阿弥の時代の能と現在の能はいろんな意味で同じではない。世阿弥時代の能を復元するのは、学問上もちろん有意義なことだ。しかし、それはまた別の次元の話である。世阿弥時代に若松の絵を背景に用いていたわけではないのだから、少なくとも若松の絵でよいという理由にはならない。

もちろん伝統を墨守することのみをよしとするわけではない。能だって新しいものを付け加えてこそ、さらなる洗練もありうるだろう。しかし、それを始めたとするが、まったくの初心者である私にとって発声から難しく、仕舞もアヒルの散歩のようにたまたたきとしたものであったが、一カ月も過ぎると何となく楽しさも加わった。

受講生の中に、谷黒あささんという幼少から大坪十喜雄先生に師事されていた方がいられて、昭和八年頃の雑誌「宝生」や貴重な書誌をいただいたり、観能の折も、いろいろご教示願った。能・狂言の鑑賞も宝生の定式能をはじめ中日五流能など数多く見る機会を得るようになった。しかし、石の上にも三年というが、三年足らずで中断してしまった不肖の弟子であった。

かねがね、定年後は能・狂言を楽しみたいと思っていたところ、朝日カルチャーセンター、NHK文化センター、中日文化センターや社教センターで、良い師を得て勉強を始めることができた。東海能楽研究会の末席にも入れていただいた一年。諸先輩の皆さんの研究成果を聴講できることを感謝している。今年、母校富士中学校の創立五十周年。そして内藤先生の七回忌も一月二十六日に行われた。奥深い能・狂言と出会って半世紀、理想ぞ 遙かである。

はあくまで伝統を継承したうえで発展でなければならぬ。伝統を無視もしくは破壊したのでは能にならない。それは別の芸術ジャンルの仕事になるだろう。世界的に能が評価されているのも、それが世代を越えて受け継がれてきた洗練の結晶であるからにほかならないのである。

《随想》
理想ぞ 遙か

上野 常策

私が初めて能・狂言に出会ったのは、五十年ほど前で中学三年生の二学期もしくは三学期で、学校からの団体鑑賞で場所は松坂屋七階ホールの仮設能舞台であったと記憶している。

流儀、演者、曲目は失念したが、大鼓の列帛の気合と能管の響きは強く心に残り、以後NHKラジオの能楽放送を機会があるたびに聴くようになった。

ところが、最近、当時の演能記録を東海能楽研究会発行の「東海能楽年鑑平成五年版」および名古屋狂言共同社発行、井上松次郎編の「狂言共同社の百年 上・下巻」を調べてみたが、昭和二十四年一月と昭和二十五年三月には松坂屋七階ホールにおける演能は記録されていない。私の記憶違いか或いは

尾張徳川家御抱能役者に関する新出史料

一 岐阜・杉島家文書について

山川 暁

江戸時代に尾張徳川家に抱えられていた能・狂言役者を研究する際の基本史料としては、各家が藩に提出した「勤書」と呼ばれる代々の勤務記録、およびその勤書をもとに藩で作成した「藩士名寄」などの尾張藩士名簿が第一に挙げられる。これに、ある年の役職および給与を藩が記録した「分限帳」、家の記録である過去帳、演能の記録などの分析を加えることにより、直線的な記述に肉付けを施しながら現在の研究は進められている。しかしながら、この「勤書」は藩に提出した手控えが各家に保存されるのみで、藩の機関に集められたであろう幾多の原本は失われている。また戦災などの諸事情によって、その手控えも多くは失われ、管見では数冊を知るのみである。

ここに紹介する杉島家文書は、狂言の和泉家および大鼓の大倉家という、いずれも一流の宗家で、尾張徳川家初代義直よりの御抱である二家の勤書を含む史料群であり、岐阜の杉島家の襖の下貼りとして伝えられた。過日、尾張徳川家に関する記録ということ、徳川美術館にお持ちになったところを

記録洩れか、いずれにしても流儀、演者、曲目は不明である。もし仮設能舞台が松坂屋七階ホールでないとするならば、筒井小学校講堂か商工会議所ホールであったのだろうか、残念ながら今となっては定かではない。

しかし能・狂言が私に強烈な印象を与えたことには変わりなく、中学校三年の国語の教科書で「羽衣」を学習し、能楽五流、神男女狂鬼、序破急とか縁語および懸詞を含め日本語の持つ美しさを教わったり、筑摩書房刊、戸川秋骨著「謡曲物語(中学生全集)」を興味深く読んだのもこの頃であった。狂言については小学校五年か六年の国語の教科書で「末広がり」を学習した。

この年(昭和二十四年)の秋、小津安二郎監督の映画「晩春」が封切られ、学校から鑑賞に行った。広津和郎の『父と娘』を映画化したもので、野田高梧・小津安二郎のシナリオを、前以て国語の時間に担当教師が朗読してくれた。

「晩春」はこの年度のキネマ旬報ベストテン第一位、芸術祭文部大臣賞、毎日コンクール監督賞、脚本賞などを受賞した素晴らしい映画であったが、その中で重要な意味を持つ観能のシーンがある。

正面の席に父曹宮周吉登智衆と娘紀子(原節子)、脇正面に三輪秋子(三宅邦子)が座って舞台を見ている七分弱の長いシーンであるが、セリフは一

言も無い。しかし、紀子の心の揺らぎが見事に描き出されている。

先日、ホームビデオで改めてこの場面を見たが、曲目は「杜若」恋の舞、演者はシテ梅若万三郎、ワキ野島信、笛島田巳久馬、小鼓北村一郎、大鼓安福春雄、太鼓金春惣一、後見青木宏一、吉田長弘、地謡観世清寿、梅若新太郎、観世静夫、戸田清二、他であった。もちろん、映画鑑賞当時は梅若万三郎の名前以外は何も知らなかった。

その後、昭和二十八年に映画「獅子の座」(監督伊藤大輔、主演長谷川一夫、田中絹代)を見た。これは、宝生流の名家で名人と称された松本長の長男で、俳人の松本たかしが、昭和二十三年に『苦楽』四月号に「初神鳴」後に「殺生石」と「一番能」を掲載した(宝生九郎の伝記小説)を映画化したものである。九郎の子供時代を津川雅彦が好演したと記憶している。この映画には宝生流一門が総出演していたと思うが、ホームビデオが見当たらず再見の機会を得られなかった。

能・狂言に深い関心を持っていないが、鑑賞する機会に恵まれなかったが、昭和二十九年一月から朝日新聞社が柳橋ガデーデンビルにカルチャーセンターを開講することになり、その数多くの講座の中に「謡曲と仕舞(宝生流)」講師内藤泰二師があり、第一期生として受講することにした。

筆者が拝見したので、ここに報告する次第である。

杉島氏によれば、これらは江戸時代末頃に建てられたご本家の改築時に、襖四面の表裏、計八面の襖の下から出てきたもので、襖一面の中に横長の紙が七段に置かれていたとのことである。この史料を中心に、その上に習字の手に用いる拓本の千字文、さらにその上に活字版のお経、最後に唐紙という順序で貼り重ねられていたらしい。随所に破れた際の補修の部分があり、そこに明治の初めの新聞が貼られていたことから、この襖は家屋の建築とともに誂えられたと考えられる。文書の総数は約一五〇枚で、下貼りであったため随所に破れた箇所があり、当初の順序も分からない。現在は杉島氏により、貼られていたままとりごと整理されているが、紙の折り跡からもとは冊子であったと考えられる。杉島家と能楽との関わりは特に知られないとのこと、おそらくこれらは古紙回収業者の手によって再利用紙として出回り、偶然に杉島家の襖の下貼紙として用いられたと推測される。

記された内容については、所蔵者の杉島氏が既に分類を試みておられるので、ここではそれに従って概略を紹介したい。

一、狂言和泉家勤書控
(弘化三年 山脇藤太郎)

演能をより豊かに肉付けし再構成する
ためにも、今後の杉島家文書の検討は
有効と考える。

尚、杉島氏のご好意によりこの史料
の控えを徳川美術館でお預かりしまし
たので、興味のある方はお知らせくだ
さい。

〔研究ノート〕
《経政》「鳥手」について

米田 真理

京都の仁和寺にて、源平合戦で落命
した平経政を弔う管弦講を、ゆかりの
琵琶を用いて行っている、経政の霊
が現れる。《経政》のこの場面は、一連
の「平家物語」にはない。この能は、経
政に縁の深い場所と事物を盛り込んだ
法要の場面を設定し、「平家物語」の後
日談的世界を展開している。

この曲には、現在喜多流だけに見ら
れる小書「鳥手」がある。シテ登場の際
の特殊演出で、通常シテは地謡(上ゲ歌)
の途中で登場し、常座にて「サシ」を謡
うのだが、この小書の場合は、地謡の途
中で登場し大小前に着座、笛が「鳥手」
という特殊な旋律を演奏するのを聴く。
一の松で坐って聴くこともある。笛が
奏する旋律は琵琶を模したものといわ

れ、法要で奏でられた琵琶の音にひか
れて経政の幽霊が現れる心である。

類似の演出に『清経』の「音取」(「恋
之音取」披講之出端)があり、こちら
は名称は違えど各流にみられ、重く扱
われている。山中玲子氏の論文「清経
『音取』の成立と変遷—小書演出をめ
ぐる考察(一)—」(東京大学留学生セン
ター紀要 第二号 一九九二年)による
と、『清経』では本来シテが笛のアシラ
イ(大小鼓は入らない)に合わせて登場
するのが決まりだったが、これが重視
されるうちに次第に凝った形になって
いき、享保頃には特別化して常には演
じられなくなり、非常に重い習事とな
ったという。

《経政》「鳥手」に関しても、江戸時代
前期までは同様の経緯をたどったと考
えられる。室町末期の小鼓伝書『幸正
能口伝書』(慶長一六)には、「つね政
はやしやうあり。いでは、笛にて出る。鼓
は不「打候」と、笛のアシライに合わ
せてシテが出る」と記す。細川五部伝書
のうち『節章句秘伝之抄』(慶長一一)
も、「二、常政の仕手ノ出ル、清常の仕
手ノ出ル、同前」と、『経政』と『清経』
とはシテの登場の仕方が同様であると
する。それが、江戸初期には特殊化し
ていったらしく、岡家蔵『観世流仕舞
付』は、「あまねしや〜。扱シテ出
る。…(中略)…鼓もなしに出る」
と、囃子なしで登場することを標準と

して記すようになる。もともと同書の
注記には、「出ハ笛二付テ出る事、本也」
とあり、笛のアシライによる登場が本
来のものであったことが示されている。

さて、先にもふれたようにこの「鳥手」
は、結果的に喜多流のみに残されるこ
ととなったのだが、その経緯について
検討してみたい。幕府に提出された家
ごとの曲目一覧である「書上」のうち
はじめて小書演出の類を記した寛政七
年および十年のものを見ると、『清経』
「音取」は五流すべてが習事として挙げ
ているのに対し、『経政』「鳥手」は喜多
流のみである。しかし、その喜多流に
おいても、それ以前にはこの演出が絶
えていたことが、この書上の提出時に
大夫であった九世古能に關係する伝書
(某氏蔵)からわかる。ここには現行と
同じ型付と笛の譜が記され、「石鳥手、
宗能公御筆の別伝書に名目斗有て仕方
無し。高村と松村と両家に当能公より
御相伝の趣、記有り」「森田方には、当
流には有之由、認有由也」とある。つ
まり、「三世宗能の別伝書に名目はあ
るが、仕方は記されていない。二世当
能以来の弟子家である高村家と松村家
(ともに紀州)には、当能から相伝され
た伝書がある」「笛の森田流には、喜多
流に『鳥手』の演出が存在することの
認めがある」と言うのである。

ちなみに、貞享ごろの笛伝書『森田
流笛之秘書』(鴻山文庫蔵)は、笛の譜

のあとに、「一 貴賤の道もあまねし
や〜、仕手顔出テ舞台ノ内入、
下二居ル。見合、右之通二笛斗吹事也。
扱笛フロイヤト留ルト太夫謡出ス。又、
笛二テ出ルモ有。其時ハ盤涉ノ呂ヲ初
メニ吹テ吉。又、橋掛ニテ太夫クツロ
ク事モアリ。能々申合可事也」と記
し、①現行と同様、②笛に合わせて出
る、③笛との兼合いは不明だが橋掛り
でクツログこともある、という三種類
の方法を示している。紀州藩の徳田隣
忠の『隣忠秘抄』(宝暦十年)にも「鳥
手」に関する記事がある。古能は多く
の曲の演出について、喜多流と関係の
深かった囃子方や弟子家の伝書を参照
し、最古と思われる型付を求めたり、
中絶していた演出を復活したりしてい
る。《経政》「鳥手」についても、過去に
存在していたことは知られるものの、
方法が定かでないために調査する
必要があったのだろう。喜多流の以降
の書上には《経政》「鳥手」は小書とし
て挙げられるようになる。

先に述べたように、管弦講の琵琶の
音は経政の霊を呼び出す契機であり、
能《経政》が展開する世界を設定する
役目を果たす。いわゆる小書演出には、
ある曲に新しい解釈を加えたり、表現
の幅をより広げようとして生れたもの
もあるが、《経政》に関しては、もとも
と笛が「鳥手」を吹いていたのであり、
現行の常の演出は、いわば省略形であ

る。一曲の根幹ともいえるべき部分を省
略して、なお舞台として成り立ち得る
こと、また、省略によってその曲の世
界を狭めてしまう恐れよりも、演出を
特別化しようとする論理のほうが勝っ
ていたことなど、能の演出の歴史には
多大な問題が潜んでいる。

〔書評〕
大原紋三郎著
『新城祭礼能番組帳 上・下』
『新城祭礼能番組帳解説』

飯塚恵理人

愛知県新城市の富永神社では、毎年
十月の大祭に能が奉納されてきた。こ
の祭礼能は元文元(一七六三)年、時の
新城城主菅沼定用の家督相続を祝って
町民たちが奉納したものが最初である。
この祭礼能の最初から現在に至るまで
の『番組帳』を新城狂言社中(現在、新
城狂言同好会)が所有されている。この
『番組帳』には、能の番組の横に、能上
演に関する事情などが書き入れられて
いる。今回それを、新城在住の郷土史
家で、自ら祭礼能に出動されていた大
原紋三郎氏が翻刻され、『新城祭礼能
番組帳 上・下』にまとめられた。この
『番組帳』は終戦までで終わっている。

大原氏はさらに、これらの番組に戦後
から現在に至るまでの番組を加えて、
その曲目・出勤者を索引にまとめられ、
それに解説を加えて『新城祭礼能番組
帳解説』として発表された。この『解説』
には代々新城の本町に住み、祭礼能に
かかわっていた大原氏でなければ書け
ない内容が多く、後世に非常に貴重な
資料となるだろう。

この『解説』は大きく三部に分かれ
ている。第一篇が「江戸時代—元文元年、
開始から幕末までの百三十二年間」。
第二篇が「明治以降—明治初年から終
戦までの七十八年間」。第三篇が「終戦
から平成七年まで—五十年間」である。
特に労作と思われるのは第四の「出勤
者の解明」である。大原氏はこの番組帳
に記載される出勤者をシテ・ワキなど
の役種ごとに分けて出勤回数を載せ、
さらにそれらの役者が町外の役者であ
る場合はどこから来た役者かを記し、
町内である場合は、屋号を記している。
明治以降の能楽史の部分は、とくに
変化がはっきりとわかって興味深い。
新政府に仕えることを嫌って静岡に移
った観世清孝が新城で道成寺を舞って
いる。また伊勢・名古屋の能楽師が師
匠として来演したり、新城から名古屋
に稽古に出かけたたりしている。この時
期は能の新たな担い手の登場する時期
でもあった。これらの新しい担い手の
中心は、実は江戸時代に全く能に触れ

た事の無い人々ではなく、稽古などは
しながらも能楽史の表面には現れない
愛好者であった。この『番組帳』と『番
組帳解説』からは、能楽師として生き
残ったお抱え役者と、それを支えた能
の愛好者の基盤がかなり具体的に把握
できる。

この『解説』のもう一つの特長を挙げ
れば、過去の記録を調査するというこ
とのみならず、現在の記録を後世に残
すという姿勢をもって書かれているこ
とだろう。第三篇第二の三「祭礼能の
改革」の記事を引用すると、「新城では
昔から祭礼能に出動するものは、本町
の氏子で男子に限る。能の流儀は喜多
流で乱能(飯塚注:こ)ではシテ方と囃
子方など役の兼職の事)はしないと決
まっていた」という。しかし上級学校へ
の進学などで町を離れる人も増えてき
たそうだ。続いて引用すると、「後継者
の育成が困難になってきた。反面、最近
は青年能、学生能などが盛んになり、学
校や会社でも謡曲や能楽の会をつくり、
特に女性の同好者は激増している。ま
た、流儀としては全国的に、観世流や
宝生流が圧倒的に多数である。新城で
も戦後、観世流、宝生流の同好者がそ
れぞれ会をつくり、和泉流狂言は由来
の狂言社中を拡大して、全町の規模で
同好会をつくった。この三者は喜多流
の新城能楽社と共に、昭和三十年に第
一回新城謡曲連合大会を開催し、同三

十五年にはこの四団体で新城能楽協会
を結成した」と、新城の能楽に関わる
集団が一変したことを記す。

能楽の歴史は社会の変遷を如実に写
している。この本の真価は、そのよう
な社会の移り変わりの中で、新城と
いう土地と能楽の変遷を愛情をもって
記録し、かつ論じていることであろう。
この本は大原氏の米寿の作であるとい
う。非常に手間のかかる作業で、若い
人でも音をあげそうだが、調査も徹底
しており、文章も非常に若々しい。面
白なのは、『解説』は、綴じの向きによ
って、場所毎に本をひっくりがえして
読んで行くようになっていて、ことであ
る。最初は乱丁ではと驚いたのだが、同
じ時期の縦書きの記事と横書きの記事
を近づけるための大原氏の工夫であり、
慣れると非常に合理的に思われる。
花祭、田楽に代表されるように、三
河は芸能の宝庫であった。大原氏には
ぜひ身体に気をつけて頂いて、今後と
も我々の師表であり続けていただけれ
ばと思う。
(大原紋三郎著『新城祭礼能番組帳
上・下』『新城祭礼能番組帳解説』
平成八年五月刊 私家版 非売品)

東海能楽研究会活動記録（平成9年1月31日現在）

平成6年7月	東海能楽研究会発足	
10月28日	『東海能楽年鑑平成5年版』刊行	
平成7年3月29日	東海能楽研究会例会準備会（於名古屋女子大学）・懇親会	
以下例会記録（題目・発表者 於名古屋女子大学）		
5月21日	先駆的能楽研究者石田元季を語る	曾谷道子氏
7月23日	世阿弥の「二曲三体」による稽古の方法と天女舞	三苦佳子氏
10月1日	室町期能楽（謡曲）旋律の変遷	小島英幸氏
11月25日	明治初期の名古屋狂言界	佐藤友彦氏
平成8年2月12日	尾張藩能楽人名資料考	飯塚恵理人氏
	「永正本元広伝書」の紹介	尾本頼彦氏
4月14日	喜多古能の歴史観	米田真理氏
6月9日	《相合袴》の周辺	安田徳子氏
	能楽蘊奥集諸本の記録	尾本頼彦氏
	古文書部会報告（古春増五郎・木下敬賢関係）	栗花光弥氏
	資料見学・懇親会（寛鋺一氏宅）	
9月8日	脇方西村家小考	藤岡道子氏
12月15日	演博蔵「狂言古図貼交屏風」の素性と価値	林 和利氏
平成9年1月26日	「目利き」の観能記	
	—明治四十四年東本願寺宗祖遠忌能をめぐる—	小林英一氏

会計報告（平成7年度）

<収入の部>		<支出の部>	
会費	66,000円	郵送費	7,200円
茶菓代	600円	茶菓代	5,175円
収入合計	66,600円	振替手数料	60円
		小計	12,435円
		次年度繰越金	54,165円
		支出合計	66,600円

東海能楽研究会会員・会友名簿

「会員」は会費納入者、「会友」はそれ以外の例会にお誘いしている方々ですが、今回は区別せずに記載いたしました。

編集後記

活動記録に見られるような意欲的な研究発表が続いています。また、ささやかながらもこのような年報を創刊することができました。この研究会の成長の証として、素直に喜びたいと思います。（H）

東海能楽研究会年報 創刊号

一九九七年（平成九年）三月三十一日発行

代表者 寛 鋺一

幹事校 名古屋女子大学 林研究室

〒467名古屋瑞穂区汐路町三十四〇

印刷者 共生印刷機